

だれにでもドア

「特にやりたいことないから、適当に金稼げればいいや」

彼は自分をいかせる分野をみつけられませんでした。

「お金がないから、大学へいけない！」

彼女は自らの可能性をいかせる分野をみつけ志したものの、進学を断念しました。

「もったいない！」高校の友人達の言葉を聞いて私はそう思いました。

なぜなら、彼らは私にはない多くの輝く才能をもっていたからです。

生まれた瞬間、私たちは無限の可能性を秘めています。

それこそ、ワールドカップで優勝することから、医者となり多くの命を救うことまで、正にその可能性は無限大です。

しかし、最初は無数にあった「可能性という名のドア」は成長を重ねていくごとにもの凄い速さで減っていき、結果的にそのドアの数は大きく限られてしまいます。また、その限られたドアの中から志をもてるものを見つけられたとしても、そのドアを開けることができない場合も多くあるのです。

冒頭の友人達は正に、そのような形で自らの可能性を狭められた者たちでした。

教育とは可能性の担保です。その教育における問題は個人の可能性を大いに左右します。

本弁論の目的は「教育格差の解消により、誰もが自己実現できる社会の基盤をつくる」ことです。

自己実現とは、自らに潜む可能性を大きくいかすことです。

そして、ある個人が自己実現できている状態とは、その人だけがもつ可能性がいかせられている状態を指し、個人の可能性がいかせられている状態とは、その人にしかできない「仕事」をおこなっている状態を指します。

仕事というのは、誰もが生活を営むために必要なものです。さらに、その仕事は社会貢献にもなります。仕事による自己実現の担保は多くの人の可能性をいかし、その社会貢献は互いの自己実現を手助けするのです。

そして、ある個人にしかできない仕事を行うには大学や専門学校といった高等教育機関において専門的な知識を得ることが大切です。なぜなら、現在の大学や専門学校は非常に多様化しており、全ての仕事に繋がる専門的な知識を学べる場となっているからです。

つまり、全ての子供たちが自らの可能性をいかせる分野をみつけ、それを探究できる高等教育機関への進学を担保してあげることが、ある個人がその可能性をいかせられることに繋がり、自己実現可能な社会への基盤となるのです。

ここで一つ注意しなければならないことがあります。それは、全ての人が高等教育を受けないといけない訳ではないという点です。

高卒でメジャーリーグに行く人や、中卒で会社をおこして成功する人も中にはいるでしょう。

しかし、彼らはあくまで自分の可能性をいかせる分野を早い段階で見つけることができたごく少数の人々であり、多くの人にとってそれらは難しいことです。また、専門的な知識は社会に入ってから学ぶことができますが、全ての人の自己実現に必要な知識は、現在ある教育課程を最後まで全うすることによってのみ担保することができるのです。

では、現状何が子供たちの自己実現を阻害しているのでしょうか？

その要因として、教育段階における文化的な格差と経済的な格差の存在があげられます。

まず、文化的な格差とは、楽器や本といった形あるもの、学歴や資格といった制度的なもの、言葉の使い方やマナーといった身体的なものなどの家庭間の差のことを指します。

この文化的な格差はとても難しい問題です。なぜなら、この格差が非常に『見えづらい格差』であるからです。例えば、楽器が家になく、音楽になんの関心も抱かなかった青年はもしかしたら自分に音楽の才能があったなんて思いもしないでしょう。しかし、ここには確実に音楽に囲まれて育った子供達との間に可能性の幅、つまりドアの数の点で差が起こっているのです。

個人が知らず知らずの内に、文化的に恵まれた人に比べ、自分の可能性の幅を狭めてしまっているところそれが、文化的格差の非常に見えづらく、難しい点なのです。

次に経済的な格差についてです。これは親の年収によっておこる、教育にかけられる金額の差をさします。経済的な理由による進学の見切りはこれにあたります。

つまり、文化的な格差は個人がもともと選べる可能性のドアの数をへらし、経済的な格差はそのドアにカギをかけてしまうのです。

では、そのような文化的な格差と経済的な格差は現状どれほどあるのでしょうか？

まず、文化的な格差について見ていきましょう。お茶の水大学によって行われた調査によれば、国語や数学などの点数が高い児童と低い児童の間では「幼少期の子供に絵本の読み聞かせをした」「子供に色々な体験をさせてあげている」

といった家庭での子供への接し方において、経験の開きが25%もあることがわかっています。幼少期の文化的豊かな体験は彼らに「知ることの喜び」を教え、それらを受けて彼らは次々と学ぶことを繰り返すようになり、自然とテストの成績もよくなるのです。

次に経済格差の現状についてです。全国の高校生3000人以上を対象にした調査によると、就職希望者のうち実に半数以上がその理由を「進学したいが、経済的にできない」からと答えていることが分かっています。

では、なぜこのような格差がおこっているのでしょうか？

まず、文化的な格差の原因として公教育における基礎教育の不徹底があげられます。

公教育とは、本来、早期の成長段階で教育的に不利な家庭環境の子供に介入し、家庭ごとの格差を抑える役割があります。

家庭ごとにおける先ほど述べたような文化的な格差そのものはどうしても存在します。しかし、公教育がしっかりと学校という場で子供たちに多くの体験や知識を与えれば、その差は大きく抑えることができるのです。

しかし、現在の学校では体育や音楽、家庭科や情報など、幅広い種類の仕事の基礎となるような応用可能性の高い多くの授業が展開されているにも関わらず、それら全てをしっかりと義務教育修了時に全うできている者は少ないです。事実、都内の公立中学校三年生の絶対評価による評定の平均値によると、どの教科においても「十分理解ができている」と評価されたものが全体の四割をみたしておりません。このように、基礎的な内容にも関わらず将来の選択の幅の基となりうる教科をしっかりと全うできていない生徒が数多くいるのです。

次に経済的な格差の原因としましては奨学金での問題があげられます。

現在、低所得者層への奨学金返済猶予期間は最大10年であり、それを超えると三か月で延滞金が10%課されるようになります。そして、このような奨学金返済への不安から奨学金を借りなかった人々の数は家計の経済的な理由で進学を断念した生徒の約3人に1人にあたる15万人にも登るといわれているのです！

そこで私はドアの数を増やすために二つの政策を、ドアのカギを壊すために一つの政策を提示します。

ドアの数、つまり個人の可能性の幅を広げるためには就学前教育の義務化と小、中学校における基礎教育の徹底を行います。

まず、小学校入学前の一年間にプリスクールという教育課程を導入することによって、子供に様々な体験を行わせます。

これにより、幼少期の文化的な体験の差を抑えます。そして、小、中学校において習熟度別クラス・及び留年制度を導入します。学習内容をしっかり理解できていない状態でも、進級できてしまう現行の教育制度では苦手な科目をますますわからない状態にしてしまいます。そして、結果的に生徒は自分には向いてない、興味がないとし、その可能性は消えてしまうのです。

そこで、習熟度別クラスをどの科目においても徹底し、子供達の基礎能力の丁寧な底上げを行います。そして、そのように徹底された環境の中でも一定のレベルまで至らなかった生徒に対しては留年をさせることで、生徒たちの授業への意識の改善、向上を行うのです。

実際にこの二つの制度を導入したフィンランドでは、世界各国一律でおこなわれたテストで文化的な社会階層間での格差が日本よりも **30%** 程抑えられています。

二つ目に、経済的な格差に関しては現行の所得連動型奨学金という将来の収入に対応した返済システムの再編を行います。本人の所得が 300 万円を超えるまでは、返済を猶予するが、それを超えるとすぐに満額の返還が始まる「出世払い型」の現行の所得連動型奨学金を、卒業後の所得に応じて、税金方式で借りた授業料を返還するものにします！税金方式によって、所得の少ない人は毎月、自分の収入に見合った額で奨学金を返済できるようになります。

現にこの制度をとりいれたオーストラリアでは、導入後の 20 年間で大学進学率が 2 倍にも伸びています。

つまり、私の政策においてはまず就学前にプリスクールで多くの文化的経験をさせ、小、中学校においては習熟度別クラスと留年制度によって多くの可能性を担保するのです。

そして、高校の段階ではそのように担保された
選択肢の中から専門的に学ぶ分野を本人に絞ら
せます。その後、充実した奨学金制度の元、志望
する高等教育機関において一つの分野を深く探
究できるようにするのです。

だれにでもドアは開かれるべきです。

断じて、冒頭の私の友人たちはその可能性を阻
められてはいけません。

そのためにも、今こそ教育段階における文化的、
経済的な格差を解消しようではありませんか！
ご清聴ありがとうございました。